

## アテネオリンピックにおける村外医学サポートについて

向井 直樹

### The experience of the medical support in the Athens Olympics

競技団体の医学サポートに携わって今年で9年。ユニバーシアード・アジア大会・世界選手権などの帯同ドクターを経験し、2年前にはソルトレーク冬季オリンピックにも行かせてもらった。冬季オリンピックは前回の長野大会でもドーピング検査係を務めたため、2大会続けて関わることができた。

しかし、「オリンピック」の名称を冠することができる夏季大会はテレビでしか見たことがなかった。昭和39年の東京大会の時は2歳で自分にはライブの記憶はない。

日本陸上競技連盟から今年の遠征帯同可否の問い合わせが来たのは2月。「参加可能」の返答をし、5月の医事委員会総会で、派遣が内定した。

#### 渡航前の混乱

ところが6月の選手選考後、17・18日に派遣前メディカルチェックの際に「帯同医師の派遣は見送り、選手団本部医師にお願いすることにした」ということを告げられた。事前合宿を含めた医学サポート活動を計画していたが、トレーナー中心のサポート計画に作り直し、本部医師にサポートの留意点を連絡するなどの作業を行った。夏の予定が空いたので、他にサポートしている日本スケート連盟の海外夏季合宿へ参加することとして、8月6から16日までの渡航日程を組んだ。

陸連医事委員長からアテネ五輪帯同の依頼についての電話を受けたのは、なんと「7月23日」。強化委員会から医師の派遣を要請されたが組織委員会への医療関係者届け出の関係から新たな人選はできず、私を村外支援で派遣したいという。

しかしすでにスピードスケートサポートの予定も立てていたし、なんといつてもカナダ合宿渡航

の2週間前である。当初はアテネ行きを断るつもりでいたが、スケート連盟医事委員のT氏から「こちらは何とかするから行きなさいよ」という言葉をいただき、合宿サポート医師の後任まで見つけてくださった。

陸連の方針の一貫性のなさには納得できないところもあったが、とりあえずはアテネへの渡航の障害になるものはなくなり、7月27日になってアテネに行くことを決めた。

渡航までの間にメディカルチェックのデータ整理、帯同トレーナーとの連絡、国内での身体トラブルがあった選手への対応などを行ったが、なにぶん急な予定変更であったため、事前国内合宿への参加ができずに十分な出発前サポートができたとはいえなかった。

#### 大会直前（すでに開会式後）

8月17日、成田空港で長距離コーチのK氏と会い、まず選手たちが事前合宿しているフランクフルトへ向かった。

フランクフルトは涼しく快適な気候であったが、到着した直後に世界アンチ・ドーピング機構(WADA)の依頼を受けたドイツ国内アンチ・ドーピング機関の係官が競技外検査に訪れた。このときの要請は、チームにいる短距離・ハードルの選手で名指しされた4名のうち2名の検査をしたい、というものであった。我々チームスタッフがどの2名を選ぶかを選択でき、しかも選手のエスコートも我々が行うという通常の競技外検査とは異なる手順での検査となった。

血液と尿の両方の検体を採取して無事に終了したが、今にして思えばこのような方法で通告していたとすれば尿のすり替え操作を行う余裕は十分

あるのではないかと考えられた。

一名、足の痛みを訴える選手がいたためその診察と処置を行い、翌朝に短距離・跳躍の選手たちとともにアテネに飛んだ。フランクフルト空港では、マラソンの野口みずき選手と遭遇した。偶然ではあるが、彼女とは同じ小学校の出身で中学の陸上部の後輩でもある。ローカルな話題で少し盛り上がり、本番での健闘を祈った。

#### アテネへ

アテネでは村外支援のため、市街のホテルに宿泊して選手村に「通勤」することになった。選手村に入るために毎日入り口でパスポートと交換にゲストパスを発行してもらいが必要があり、しかも1日に1回しか出入りできない、午前9時から午後9時までの限定という条件である。到着翌日の19日はまず選手村に行き、陸上チームのトレーナールーム(写真1)で情報交換と選手の状態チェックをした後に、22日に迫った女子マラソンの選手を空港まで迎えに行った。好成績が期待される彼女らのコンディションを確認し、必要であれば何らかの対応策を講ずるためである。マラソン陣のコンディションは上々であったが、同じ時間帯に女子競歩の選手も到着(便は別)するためこの選手とも面談するはずが、場所の連絡がうまく取れずに空振りしてしまった。選手としては「選手村で診てもらえばいい」と思ったようだが、私はこの日の入村の権利をすでに使ってしまっておりもう選手村には入れない。この「一度離村したらその日は再入村できない」ことは他の選手の処置要請でも問題となり、結局宿泊ホテルまで1時間かけて出向いてもらうことになった。



写真1

幸いなことにこの選手の問題は治療処置により改善したが、選手との接触に制限がある状況でのサポートはかなり困難であった。

#### 競技開始

この状況は競技が始まってからのほうがより影響を受けた。選手村への入村制限以外にもトレーニングエリアや競技エリアには入れないなど、チーム医師といってもADカードを持たない(持たせてもらえない)身としては、競技終了直後の選手のケアをする場所にも行けず、選手村でコンディショニングの手伝いをするしか方法がなかった。ただし、村外に滞在するマラソン代表のケアについてはそれほど不便無く行動できた。

とはいえ、マラソンのフィニッシュ地点ではやはりADカードの有無が大きく影響し、結局単なる観客として競技を見、ゴール後は疲れきった選手たちの様子を心配しながら祈るしか方法はなかった。幸い本部医師とトレーナーがフィニッシュ地点まで来てくれていたので、選手たちの対応はお任せすることができたのだが、チーム医師としては本意なことであった。

競技中に新たに発生した問題はほとんどなかったが、前述したように選手と密着していない医学サポート活動が困難だったのは最後まで同様であった。

ただし、選手団本部スタッフや、トレーナーなどチームのサポートスタッフとの連絡、連携がうまくいっていたため、支障は最少に抑えられたと思っている。

大会の救護体制についても注意してみっていたが、救護ステーションの準備(写真2)や選手の傷害



写真2

等への対応は迅速であった。見習いたいものである。

#### ドーピング疑惑

女子マラソンと同じ日に男子ハンマー投があり、その日の結果では日本選手は2位となった。しかし、翌23日になってコーチから「1位の選手に不審な動きがあった」との報告がありそれについてWADAに確認したところ内偵が始まっているとの情報を得た。

アテネ大会としてはこの選手は「再検査拒否」ということで失格になったが、いったんはドーピング検査役員が検体採取手順を認めており、この選手側の言い分にも理がある。競技外検査の状況からいって検体採取が厳密にされたかどうか疑問があるようにも思われ、いかに検体数を増やしても個々の検査の方法が厳密でないと、クリーンなアスリートを守る活動になり得ないと感じた。

チームの競技成績は金メダル2、メダル以外の

入賞6と当初の目標を達成したが、今回のサポートは満足なものとはいえない。大会開催時の対応だけでなく、代表決定後からの数週間（今回は2ヶ月余りあった）を如何にうまく過ごすかで状況は大いに異なる。本来ならば出発前の事前合宿などで十分な体制をとり、大会前のコンディショニングサポートを行うべきだっただろう。さらに現地での活動も制約があり、代表選手に無用な負担をかけたことも問題であった。しかし、他のスタッフとの連携は比較的円滑に行われ、この点では評価ができる遠征であった。

十分なサポートを行うためには、サポートスタッフを早期から決定して国内事前合宿や渡航後の調整にもそのスタッフが参加し、戦うためのクルーとして一体感を持った活動をすると同時に、直前の状況によって備品等の追加を行える体制作りが必要と感じられた。

今回の経験を生かし、来るべきトリノ冬季大会ではよりよいサポートを行いたい。



マラソン会場にて、ソウル五輪金メダリストのロザ・モタさん（ポルトガル）とともに